

急成長する中国で子育て

緊張感をもち続ける一方で、人々の温かみに触れることが多かった北京と蘇州での生活を振り返る。

フレンズ 帰国生 母の会
くりはらはるこ
栗原暖子

北京でベビーシッター探し

2008年北京オリンピックが開催された翌年の夏、夫の赴任に伴い、2歳半と6カ月の2人の娘とともに北京での生活が始まった。

真夏の北京は思いのほか過ごしやすく、日本と違い湿度が極端に低いため、気温が高くても木陰に入ればひんやりとしていた。中国の内陸には春と秋がそれぞれ1週間程度しかなく、夏が終わって10月の国慶節が過ぎたら10月末には冬が始まる。0歳の赤ん坊を極寒の外気にさらすことは北京人の常識としてはあり得ない。1歳に満たない子どもを冬の間はずっと室内で育てなければならないため、とにかく大急ぎで中国語で“アイさん”と呼ばれるホームヘルパー(ベビーシッター)を探した。月曜から金曜の9時～17時の日中はずっとお手伝いさんとお昼を食べ、夕飯の仕度を共にする生活になった。

北京自体はオリンピック後ということもあり、



アイさんと子どもたち

ショッピングセンター、地下鉄、道路が整備され、中国経済の急成長の渦中にあるのだということを実感しながら生活できた。しかしながら、最大の難点は空気と食の安全である。汚染された空気ですら太陽が見えないことも日常

になっていた。各部屋にいくつもの空気清浄機を置いた。

人びとの温かみに触れる

12年の10月、国慶節を迎えようとしていた頃、私が自転車の後ろに子どもを乗せ走っていると、前方から卵を握りしめて進んでくる集団が見えた。初めは何が起こったのか分からないまま自転車をこいでいたが、日本大使館前まで来て事の重大さを徐々に理解し始め、急いで自宅に引き返した。「尖閣諸島」の問題で中国人による反日デモが始まったのである。

初めの1週間は、そのうち収束するだろうと楽観視していたのだが、徐々に悪化していった。日本車が大勢の人に叩かれている音まで聞こえてきた。デモの間は買い物に行くこともはばかられたので、アイさんが買ってくる野菜やお肉で食いつないだことは忘れがたい苦い思い出である。

一方、中国の人たちの温かみに触れることも



中国国慶節